

資料・都新聞掲載の『大菩薩峠』について

山根正博

中里介山『大菩薩峠』は、大正二年九月十二日から都新聞に連載されているが、初出時のものと単行本化されたものとの間の変更点が多い。初出を参照しなければならぬ場合は、掲載日の特定に困難が伴う。この資料は現行の『大菩薩峠』と『都新聞復刻版』(柏書房)を照合し、その関係を示したものである。この資料が掲載日特定に伴う労苦の軽減の一助にならんことを願うものである。

都新聞掲載時の題

- 「大菩薩峠」 大正二年九月十二日～大正三年二月九日、  
大正三年八月二十日～大正三年十二月五日
- 「龍神(大菩薩峠の中)」 大正四年四月七日～七月二十三日
- 「間の山」 大正六年十月二十五日～十二月三十日
- 「大菩薩峠 第五篇」 大正七年一月一日～大正八年十二月十七日
- 「大菩薩峠 第六篇」 大正十年一月一日～大正十年十月十七日

大阪毎日・東京日日新聞夕刊に大正十四年一月六日より「大菩薩峠 無明の巻」が連載される。

現行の『大菩薩峠』と都新聞初出との関係

- 甲源一刀流の巻 大正二年九月十二日～大正二年十二月十八日
- 鈴鹿山の巻 大正二年十二月十九日～大正三年二月九日、  
大正三年八月二十日～大正三年九月三日
- 壬生と島原の巻 大正三年九月四日～十二月五日
- 三輪の神杉の巻 大正四年四月七日～六月十一日

- 竜神の巻 大正四年六月十二日～七月二十三日
- 間の山の巻 大正六年十月二十五日～十二月三十日
- 東海道の巻 大正七年一月一日～三月六日
- 白根山の巻 大正七年三月二十二日～五月一日
- 女子と小人の巻 大正七年三月七日～三月二十一日、  
大正七年五月二日～六月二十日

- 市中騒動の巻 大正七年六月二十一日～八月十七日
- 駒井能登守の巻 大正七年八月十八日～十月六日
- 伯耆の安綱の巻 大正七年十月七日～十一月二十日
- 如法闇夜の巻 大正七年十一月二十一日～大正八年一月二十九日
- お銀様の巻 大正八年一月三十日～四月二十三日
- 慢心和尚の巻 大正八年四月二十四日～六月二十九日
- 道庵と鱈八の巻 大正八年六月三十日～八月十五日、  
大正八年八月二十七日～九月十五日

- 黒業白業の巻 大正八年八月十六日～八月二十六日、  
大正八年九月十六日～十二月十七日
- 安房の国の巻 大正十年一月一日～三月十八日
- 小名路の巻 大正十年三月十九日～五月十日、  
大正十年五月二十四日～六月二十九日

- 禹門三級の巻 大正十年五月十一日～五月二十三日、  
大正十年六月三十日～七月十七日、  
大正十年七月二十六日～十月二日
- 無明の巻 大正十年七月十八日～七月二十五日、

大正十年十月三日～十月十三日

### 初出との異同詳細

#### 記録の見方

- ・都新聞掲載のもの(初出)と現在ちくま文庫などに掲載されているもの(現行)を比較した。
- ・初出と現行を比較し、筋の変更を中心に記録した。その場合は「初出↓現行」という形で表記してある。
- ・言い回しの変更等は膨大な量になるため、記録は見合わせた。
- ・その他、作者からのお知らせなど、気になる事項は適宜記録した。

### 甲源一刀流の巻

大正二年九月十二日～大正二年十二月十八日

#### 一 (現行本での章) 九月十二日

九月十二日

「上り三里、下り三里」↓「上下八里にまたがる難所」

なし↓「標高六千四百尺」

八幡↓上野原

挿絵について註あり。「放れ駒」は「走り馬」の誤りらしいが、翌日の本文

も「放れ駒」のまま。十九日の挿絵より走り駒に。

#### 二 九月十三日～九月十四日

九月十三日

観音堂↓妙見堂

#### 三 九月十五日～九月十六日

九月十六日

少女と老人の旅の理由(三十三所巡り、四国巡り)↓なし

大菩薩峠を通る人が松明を用意するという説明↓なし

#### 四 九月十七日～九月十九日

九月十七日

相馬将門の血統↓相馬の血統

〈参考〉他生の巻 仏頂寺弥助の言葉

「多摩川の奥の高地で、江戸から甲州裏街道、つまり大菩薩越えをするその途中、御岳山の麓あたり。あの辺は、むかし関東の野を追われた平将門の一族と、甲州武田を落ちて土着した子孫が住んでいる。それで剣術は、甲源一刀流が流行っている。それだ、その男だ、あれは……」

と言って、仏頂寺弥助が先達で、塩尻峠の不思議なる盲剣客のことを頻りに思い返し、(後略)

忍藩の修行者青柳、川越藩の修行者齊藤、百姓の息子平太郎などの門弟の説明↓説明なし

九月十八日

齊藤さん↓安藤さん(以後同じ)

五 九月二十日～九月二十一日

六 九月二十二日～九月二十三日

九月二十二日

龍之助が与八に告げる命令の内容↓現行では耳に口をつけて囁くので、内容は分らない。

与八が龍之助の命令を受け入れる理由

命令を聞かないのなら水車小屋から追い出す↓「この若者は、竜之助を見ると疎んでしまうのが癖」となる。斬られるかとも思っている。

七 九月二十四日～九月二十七日

九月二十五日

水車小屋での龍之助とお浜の会話↓この一回分全体がなし

八 九月二十八日～九月二十九日

九月二十八日

お浜帰宅後文之丞に龍之助が憎いと訴える↓なし

九 九月三十日～十月一日

十 十月二日

十月二日

お浜からの手紙の詳細↓なし

十一 十月三日～十月五日

十二 十月六日～十月九日

十月六日

五年目毎↓四年目毎

奉納試合の日付

天保十三年五月五日↓なし

因みに天保十三年は一八四二年。現行本では奉納試合は一八五八年と推定される。十二月七日に時代設定の変更が告げられる。

十月七日

定紋について

(放れ駒は変紋なり)↓なし

十三 十月十日

十四 十月十一日

十五 十月十二日～十月十五日

十月十三日、十四日

宇津木方の闇討ち一行を龍之助がしのぐ場面↓二回分なし

十月十五日、十六日

試合後の机、宇津木家の様子↓なし

十月十七日～二十二日

外祖父片柳右近のもとで修行をする宇津木兵馬、箱根で七兵衛お松と知り合う↓六回分なし

十六 十月二十三日～十月二十五日

十七 十月二十六日

十八 十月二十七日～十月二十九日

十九 十月三十日～十月三十一日

二十 十一月一日～十一月五日

十一月六日、七日

文之丞の墓参りをする兵馬↓二回分なし

二十一 十一月八日～十一月九日

二十二 十一月十日～十一月十二日

二十三 十一月十三日～十一月十四日

二十四 十一月十五日～十一月十七日

十一月十六日

兵馬の突きを「突き、よろし」と虎之助が判じる部分↓相打ちで、どちらが深いかの判定はなし。

十一月十七日

龍之助、虎之助が立ち会わないことを根に持つ部分↓なし

二十五 十一月十八日～十一月二十日

なし(二十三日に掲載)↓天下の三剣客の説明

初出ではお松との再会だが、現行本ではお松との最初の出会い

二十六 十一月二十一日～十一月二十二日

十一月二十二日

お松、兵馬に手紙を書く↓なし

十一月二十三日～二十八日

お絹がお松の手紙を悪用する部分↓六回分なし

二十七 十一月二十九日～十二月三日

二十八 十二月四日～十二月六日

十二月六日

お松、与八と兵馬が知り合いであることを知る↓なし

二十九 十二月七日～十二月十日

十二月七日

初出 時代設定変更

龍之助三十三歳、兵馬十七歳、外からは黒船、うちには尊皇攘夷

十二月八日

近藤勇が左文字↓近藤勇が虎徹

三十 十二月十一日～十二月十四日

十二月十一日

新坂下の闇討ちは古老から聞き得たもので架空の立ち回りではないと註あり。↓なし

三十一 十二月十五日～十二月十七日

三十二 十二月十八日

鈴鹿山の巻

大正二年十二月十九日～大正三年二月九日、  
大正三年八月二十日～大正三年九月三日

十一 一月二十九日～二月一日

一月三十日

お浜から兵馬への手紙↓なし

一月三十一日

お浜の死骸を抱く→与八↓一回分なし

十二 二月二日～二月三日

十三 二月四日～二月八日

十四 二月九日

二月九日

現行本では最後に「ちちははの めくみもふかき こかはてら ほとけのちかひ たのもしきかな」があるが、初出にはなし（初出では大正四年五月十日に登場）

十五 八月二十日～八月二十六日

八月二十日

現行本では最初に「東海道、関 江戸へ百六里二丁 京へ十九里半」があるが、初出にはなし。

八月二十三日

京都から来た娘が以前黒坂の被害にあったという話↓なし

八月二十六日

お豊と真の二人の旅に何かいわくがあるかのような仄めかし↓なし

十六 八月二十七日～八月二十八日

八月二十八日

龍之助の心についた火の説明。初出では「島田を打ちたい」だが現行本では「お浜に似た女をみた」ことに関連させられている。

八月二十九日～三十一日

老僧（拳骨）と龍之助のやり取り↓大幅に省略（八月三十一日はほぼなし）

十七 九月一日～九月三日

九月一日～九月三日

壬生と島原の巻

大正三年九月四日～十二月五日

鈴鹿山の巻

大正二年十二月十九日～大正三年二月九日、  
大正三年八月二十日～大正三年九月三日

一 十二月十九日～十二月二十一日

二 十二月二十二日～十二月二十三日

十二月二十二日

龍之助と芹沢鴨、「八犬伝」について語る↓なし

十二月二十四日

神尾から逃げ回るお松の様子↓一回分なし

三 十二月二十五日～十二月三十日

四 一月一日～一月二日

一月三日

龍之助と兵馬の因縁と、近藤・土方と芹沢の勢力争いが絡み合う↓一回分なし

五 一月四日～一月九日

一月六日

与八とお松、今後の相談をする↓一回分なし

一月十日～十一日

兵馬をかくまった道庵と浪人達の喧嘩↓二回分なし

六 一月十二日

一月十三日～十四日

道庵の家に土方が来る。道庵にかくまわれた兵馬と与八が出会う。↓二回分なし

七 一月十五日

一月十五日

現行本ではここで与八と兵馬が出会う

八 一月十六日～一月十九日

九 一月二十日～一月二十四日

十 一月二十五日～一月二十八日

一 九月四日～九月五日  
九月四日

道中用心六十一カ条↓なし

二 九月六日～九月七日

三 九月八日～九月九日

四 九月十日～九月十二日

五 九月十三日～九月十五日

九月十四日

山崎讓の説明。新選組↓新徴組

六 九月十六日～九月二十九日

九月十七日～十九日

盗賊に入られた菱屋での一件↓なし（十月十九日～二十一日において話題に上る）

初出では兵馬は逃げた盗賊の一人の声に聞き覚えがある。

盗賊が現行本では「浪人者が数人、隊をなして一つの駕籠を守って行く」と変更されている。これがお梅を奪った一隊である。

九月二十一日～二十六日

お梅が芹沢鴨の妾となるまでのいきさつが省略されている。

七 九月三十日～十月二日

八 十月三日～十月四日

九 十月五日～十月八日

十月七日↓なし

十 十月九日～十月十五日

十月十三日

七兵衛が後に多摩川の河原で斬られることになるという説明↓なし

十一 十月十六日～十月十八日

十二 十月十九日～十月二十一日

十月十九日～二十一日

初出、現行本とも菱屋の盗賊の件が兵馬と井村の間で問題となる。

十月二十二日～三十一日

芹沢をはじめ新選組と力士の喧嘩↓恐山の巻で省略して説明される。

十三 十一月四日～十一月六日

十一月一日～三日

与八と郁太郎の暮らしぶりを述べた部分↓なし

十四 十一月七日～十一月十五日

十五 十一月十六日～十一月十八日

十一月十九日

兵馬が七兵衛と出会い、お松の身の上を知る↓なし

十六 十一月二十日～十一月二十九日

十一月二十一日～二十五日

お松が兵馬のもとを訪ねる。そこに七兵衛もやってきて、龍之助が兵馬の仇であることもお松の仇であることを伝える↓なし

十七 十一月二十九日～十二月五日

十二月一日～四日

お松と兵馬、語らう。翌日七兵衛が現れ龍之助の行き先を告げる。兵馬とお松、ともに龍之助を追う↓なし

十二月五日

（前略）これより机龍之助は一旦、十津川の乱に加はりて戦ひ、硝煙の為に両眼の明を失ひ、杖にすがりて辛くも東に帰り、見えぬ眼に郁太郎を抱きて、幽明を隔てつゝ、父彈正の事を思ふ時、兵馬はたづね来り、共に御嶽山上に登りて白刃の間に相見ゆ、眼盲ひたる後の龍之助が剣法、なほ精妙にして人の胆を奪ふ、されど結局は兵馬の手にて死ぬ也、七兵衛と与八との間にまた綿々たる悲情ありお松及び郁太郎等の成行についても語るべきもの少からず、恩讐共に大菩薩に帰るまでを、此の調子もて誌し行かば（後略）

三輪の神杉の巻 大正四年四月七日～六月十一日

一 四月七日

二 四月八日

三 四月九日

四 四月十日

五 四月十一日～四月十二日

六 四月十三日

七 四月十四日

八 四月十五日

九 四月十六日

十 四月十七日～四月二十日

十一 四月二十一日～四月二十二日

十二 四月二十三日～四月二十五日

十三 四月二十六日～五月三日

十四 五月四日～五月十日

五月六日～十日

八木の宿でのお松と兵馬の生活↓大幅に削除

十五 五月十一日～五月十二日

十六 五月十三日

十七 五月十四日

十八 五月十五日～五月二十日

五月十八日～二十日

金蔵と鍛冶倉の二人が倒れた後の現場に着いた七兵衛が、その様子をお松に

語る部分↓なし

十九 五月二十一日～五月二十八日

二十 五月二十九日～六月十一日

五月二十九日～三十日

物思いにふけるお豊↓なし

六月二日

お松とお豊の会話↓なし

竜神の巻 大正四年六月十二日～七月二十三日

一 六月十二日～六月十七日

二 六月十八日～六月二十日

三 六月二十一日～六月二十三日

四 六月二十四日～六月二十六日

五 六月二十七日～七月一日

六 七月二日～七月五日

七 七月六日～七月九日

八 七月十日～七月十一日

九 七月十二日～七月十四日

十 七月十五日～七月十九日

七月十五日↓なし

十一 七月二十日～七月二十二日

十二 七月二十三日

間の山の巻 大正六年十月二十五日～十二月三十日

一 十月二十五日

二 十月二十六日

三 十月二十七日

四 十月二十八日～十月二十九日

五 十月三十日～十一月三日

六 十一月四日～十一月五日

七 十一月六日～十一月十日

八 十一月十一日～十一月十二日

九 十一月十三日

十 十一月十四日～十一月十九日

十一 十一月二十日～十一月二十五日

十二 十一月二十五日～十一月二十八日

十三 十一月二十八日～十二月四日

十四 十二月五日～十二月九日

十二月五日

船のお祓いの場面↓なし

十二月九日

海上でお君をさがす米友↓なし

十五 十二月十日～十二月十三日

十六 十二月十四日～十二月十五日

十七 十二月十六日～十二月十九日

十二月十八日↓なし

十八 十二月二十日～十二月二十二日

十九 十二月二十三日～十二月三十日

十二月二十三日↓なし

十二月二十七日

兵馬、志士らしき武士の鬘を斬る↓なし

十二月三十日

「聞の山」の巻はこれで終る。主なる人の運命はいつか申した通りです。この小説、最初の「大菩薩峠」の時分から読みたいとの注文が多くありましたから、今度机龍之助が大菩薩峠の上で老巡礼を斬る処から島田虎之助が新坂下で新徴組を相手に劍禅一致の妙腕を現す処まで一巻に纏めて「甲源一刀流の巻」と題し、印刷済みでしたが、遅くも来月半までに製本出来上がると存じます。(中略)さて来年よりは題を改めて最初の大菩薩峠に戻し、第五篇一回として稿を続けます、この続き物も継続数年に亘りましたが今度はこれで完結させることに致します。

### 東海道の巻

大正七年一月一日～三月六日

一 一月一日～一月五日

二 一月六日～一月十日

一月七日～八日

築山御前(家康の本妻)の話↓なし

一月九日

龍之助は、築山御前、文之丞、お浜、お豊に夢で苦しめられる↓なし

三 一月十一日～一月十七日

四 一月十八日～一月二十五日

五 一月二十五日～二月四日

一月二十九日

がんだり七兵衛、遊行上人の部屋に盗みに入り、しくじる↓なし

一月三十一日～二月二日

七兵衛がお絹に話しかけ、龍之助と引き離す↓なし

六 二月五日～二月十日

七 二月十一日～二月十三日

八 二月十四日～二月二十四日

二月十四日～十七日

以前兵馬に鬘を斬られた志士らしき武士と兵馬との一悶着↓なし

二月十八日

龍之助を逃がしたお絹を取り押さえる兵馬(このことが米友との立ち会いにつながる)↓なし

二月二十四日

(前略)第二の巻は、お浜を殺した机龍之助が憂愁を抱いて鈴鹿越をして京都に入り島原の狂乱までを纏めて「鈴鹿山の巻」と題し、(後略)

九 二月二十五日～三月六日

三月二日～六日

島田虎之助の毒殺に道庵所有の毒が絡んでいるという話がお絹から龍之助に伝えられる↓なし

### 白根山の巻

大正七年三月二十二日～五月一日

一 三月二十二日～三月二十八日

三月二十三日～二十四日

龍之助、島田の死について「惜しい事をした」とくり返す↓大幅圧縮

二 三月二十九日～三月三十一日

三 四月一日～四月三日

四月三日

(前略) 第三卷は「壬生と鳥原の巻」第四卷は「三輪の神杉の巻」第五卷は「龍神の巻」第六卷は「間の山の巻」第七卷は「東下りの巻」といふ順序で(後略)

四 四月四日～四月十日

五 四月十一日～四月十三日

六 四月十四日～四月二十日

四月十五日↓なし

七 四月二十一日～四月二十二日

八 四月二十三日～四月二十四日

九 四月二十五日～五月一日

女子と小人の巻 大正七年三月七日～三月二十一日、五月二日～六月二十日

一 三月七日～三月二十一日

三月七日↓なし

三月八日～十一月

道庵が毒を盗まれたことに気がつく部分↓なし

二 五月二日～五月四日

三 五月五日～五月九日

五月五日↓なし

四 五月十日～五月十三日

五 五月十四日～五月十六日

六 五月十七日～五月二十一日

五月十八日～十九日↓大幅圧縮

七 五月二十二日～五月二十四日

五月二十三日

お君が来る前に、座敷の様子を探ろうとしていた金助を神尾が捕まえる↓お君が来てから人の気配に気づく。

八 五月二十七日～五月三十一日

五月二十七日

「女子と小人とは養ひ難し」↓なし

九 六月一日～六月三日

六月三日↓なし

十 六月四日～六月六日

六月六日↓大幅に省略

十一 五月二十五日～五月二十六日・六月七日～六月八日

六月八日↓大幅に省略

十二 六月九日～六月十六日

六月九日～六月十日

兵馬、宮本武蔵物語を読む↓なし

十三 六月十七日～六月二十日

六月二十日

兵馬を慕うお君↓大幅省略

市中騒動の巻 大正七年六月二十一日～八月十七日

一 六月二十一日～六月二十五日

六月二十一日

奈良王の宮の址に向かう兵馬、途中で龍之助を載せた駕籠とすれ違ふ↓なし

六月二十五日

兵馬がお徳から馬を借りる↓お徳とは明示されない。それらしくは書いてあるが。

二 六月二十六日～六月二十七日

三 六月二十八日～七月一日

六月二十九日

ケレンスキー↓トロツキー

四 七月二日～七月六日

七月三日

大菩薩峠第三卷「壬生と鳥原の巻」が漸く出来ました



七月六日

箱屋惣兵衛宅を訪れる覆面の武士の落としていった図面の裏に「西郷吉之助殿」という文字が見える↓図面自体が登場しない

五 七月七日～七月十日

六 七月十一日～七月十四日

七 七月十五日～七月十七日

八 七月十八日～七月二十日

九 七月二十一日～七月二十五日

十 七月二十六日～七月三十日

十一 七月三十一日～八月五日

十二 八月六日～八月七日

十三 八月八日～八月十一日

十四 八月十二日～八月十四日

十五 八月十五日～八月十七日

駒井能登守の巻 大正七年八月十八日～十月六日

一 八月十八日～八月二十七日

二 八月二十八日～八月三十一日

三 九月一日～九月五日

四 九月六日～九月八日

五 九月九日～九月十三日

六 九月十四日～九月十八日

九月十七日

大菩薩峠第四冊「三輪の神杉の巻」が漸く出来ました

今年中に第五「龍神の巻」と第六「間の山の巻」と、第七「女子と小人の巻」を出してしまひたいと思ひます、

七 九月十九日～九月二十一日

九月二十一日

お松、駒井の居間に招かれる。その場で暇な時に邸を訪ねに来るように言わ

れる↓一回分なし

八 九月二十二日～九月二十六日

九 九月二十七日～十月一日

十 十月二日～十月六日

伯耆の安綱の巻 大正七年十月七日～十一月二十日

一 十月七日～十月十日

二 十月十一日～十月十五日

三 十月十六日～十月十八日

四 十月十九日～十月二十四日

五 十月二十五日～十月二十九日

六 十月三十日～十一月二日

七 十一月三日～十一月七日

八 十一月八日～十一月十二日

九 十一月十三日～十一月二十日

十一月二十日

甲府城内の弛んだ氣風を説明した部分↓なし

如法闇夜の巻 大正七年十一月二十一日～大正八年一月二十九日

一 十一月二十一日～十一月二十四日

二 十一月二十五日～十一月二十七日

三 十一月二十八日～十二月三日

四 十二月四日～十二月八日

五 十二月九日～十二月十二日

六 十二月十三日～十二月十七日

十二月十六日

これよりやや後の話として小沢一仙が甲府城を官軍へ売りつけようとした話が紹介される↓なし

- 七 十二月十八日～十二月二十日
- 八 十二月二十一日～十二月二十七日
- 九 十二月二十八日～一月十三日
- 十 一月十四日～一月二十二日
- 十一 一月二十三日～一月二十九日

お銀様の巻

大正八年一月三十日～四月二十三日

- 一 一月三十日～二月三日
- 二 二月四日～二月七日
- 三 二月八日～二月九日
- 四 二月十日～二月十二日
- 五 二月十三日～二月二十一日、三月四日
- 二月十五日

大菩薩峠の第六巻「間の山の巻」が漸く出来ました。第七巻は多分「東海道  
の巻」とするつもりであります。それから此の小説は、昔の源氏物語や八犬  
伝よりもまだまだ大部の小説になるのであります。わざわざさうするつもり  
では無く、ひとりでに、さうなつて行くのであります。

- 六 二月十四日～二月二十八日
- 二月二十七日、二十八日
- 穴切明神の前でお銀様に抱き上げられた子供が夜番に預けられる。その子を  
お松が自分の身の上と重ね合わせる。その子の名は茂太郎↓なし
- 七 三月一日～三月三日
- 八 三月五日～三月十一日
- 九 三月十二日～三月十五日
- 三月十六日
- 米友との別離を悲しむお君↓一回分なし
- 十 三月十七日～三月二十二日
- 十一 三月二十三日～三月二十九日
- 十二 三月三十日～四月二日

- 十三 四月三日～四月十二日
- 十四 四月十三日～四月十九日
- 十五 四月二十日～四月二十三日
- 四月二十三日

龍之助とお銀様が小泉家でかくまわれる部屋がお浜の位牌が置かれてあった  
一間であったという情報↓なし

慢心和尚の巻

大正八年四月二十四日～六月二十九日

- 一 四月二十四日～四月二十七日
- 二 四月二十八日～五月二日
- 三 五月三日～五月五日
- 四 五月六日～五月十二日
- 五月九日

長屋に乳飲み子を見に行く話。二月二十七、八日のことを踏まえている。↓

- 五 五月十三日～五月二十日
- 五月十六日
- 穢多非人↓ほいと賤人
- 五月十九日
- 穢多非人↓屠者賤民
- 六 五月二十一日～五月二十七日
- 七 五月二十八日～五月三十日
- 八 五月三十一日～六月八日
- 六月五日
- 待ち伏せしていた曲者が「駕籠の中はお松」と言う↓なし
- 九 六月九日～六月十二日
- 十 六月十三日～六月十六日
- 十一 六月十七日～六月二十五日
- 十二 六月二十六日～六月二十九日

道庵と鯉八の巻

大正八年六月三十日～八月十五日、  
八月二十七日～九月十五日

一 六月三十日～七月六日  
七月三日

毒の話あり↓島田虎之助の毒殺の話はないがここは残る。

二 七月十九日～七月二十三日

三 七月七日～七月八日

四 七月九日～七月十二日

五 七月十三日～七月十五日

六 七月十六日～七月十八日、七月二十三日～七月二十四日

七 七月二十五日～八月五日

八 八月五日～八月十五日

八月十一日

穢多非人↓ほいと非人

八月十四日

穢多、非人共↓憎い非人ども

九 八月二十七日～八月二十九日

八月二十七日

大菩薩峠の第七巻「東海道の巻」が漸く出来ました。

十 八月三十日～九月五日

九月六日

両国橋の思い出にふける米友↓一回分なし

十一 九月七日～九月九日

十二 九月十日～九月十五日

九月十一日↓一回分なし

黒業白業の巻

大正八年八月十六日～八月二十六日、  
九月十六日～十二月十七日

一 八月十六日～八月十九日

八月二十日↓一回分なし

二 八月二十一日～八月二十二日

三 八月二十三日～八月二十六日

八月二十三、二十四日

悪女大姉の位牌を拾い、処置に窮するお銀様↓圧縮

四 九月十六日～九月二十六日

五 九月二十七日～九月二十八日

六 九月二十九日～十月四日

七 十月五日～十月六日

八 十月七日～十月十一日

十月七日～十一日

兵馬と金助のやり取り、お松とお君のやり取り↓圧縮

九 十月十二日～十月十八日

十 十月十九日～十月二十三日

十月十九日、二十日

兵馬と東雲の碁の手合わせ↓大幅圧縮

十一 十月二十四日～十月三十一日

十月二十七日

茶袋の言い分↓なし

十二 十一月一日～十一月三日

十一月二日

南条、五十嵐が米友に気づく↓なし

十一月三日

五回分の原稿が都新聞掲載前に紛失。あらすじとその続きが掲載される。

十三 十一月四日～十一月九日

十一月四日

お角と駕籠屋のやり取り↓一回分なし

十四 十一月十日～十一月十五日

十一月十三日

道庵は留守↓道庵は寝ている

十一月十四日

米友が龍之助と行動をともししている↓米吉

十一月十五日↓一回分なし

十一月十六日↓一回分なし

十一月十六日↓二十日

お松とお君の間での米友の噂、お君の懊惱、お君の夢↓大幅圧縮

十一月二十三日↓十一月二十七日

十一月二十一日

慶応二年という年は多事なる年でありました。↓なし

自由民権、憲政擁護、普通選挙↓なし

十一月二十二日

折助の近況↓なし

十一月二十八日↓十一月三十日

十二月一日↓十二月四日

十二月五日↓十二月十一日

十一月十二日

老女の邸で病床に伏すお君↓一回分なし

十二月十三日↓十二月十七日

十二月十五日

斧公、金助を鯨八の洋行の人足に誘う↓一回分なし

十二月十七日

或友人が斯う云ふ事を云つて呉れました。「形式を通俗に取つて内容を測る

べからざる処に置くそれである。卒然として之を読めば演義講談の類で、再

び之を読む時に大乘不可思議の処へ持つて行かれる心持がしないではない。」

二月三日

二月四日↓一月六日

二月六日↓一月十一日

二月十二日↓一月十三日

二月十四日↓一月二十日

二月二十一日↓一月二十五日

二月二十六日

二月二十七日↓一月三十日

二月三十一日↓二月二日

二月三日↓二月六日

二月七日↓一回分なし

七兵衛と山崎、安中藩の同心に質問される。

二月八日↓二月九日

二月十日↓二月十四日

二月十日

金と女に悩む兵馬↓一回分なし

二月十五日↓二月十六日

二月十七日↓二月十九日

二月二十日↓二月二十五日

二月二十六日↓三月一日

三月二日、三日

化け物屋敷の由来↓なし

三月四日↓三月十四日

三月十五日↓三月十八日

小名路の巻 大正十年三月十九日↓五月十日、五月二十四日↓六月二十九日

安房の国の巻

大正十年一月一日↓三月十八日

一月一日↓一月二日

三月十九日↓三月二十三日

三月二十四日↓三月二十六日

三月二十七日↓三月二十九日

四 三月三十日～四月三日

五 四月四日～四月七日

六 四月八日

七 四月九日～四月十二日

八 四月十二日～四月十四日

九 四月十五日～四月二十一日

四月二十一日～二十五日

駒井、お角、がんりきが舟で一堂に会する。伯耆の安綱の交渉やお絹の舟との諍いなどあり。↓なし

十 四月二十六日～五月三日

四月三十日

龍之助が父弾正、丹後守、虎之助を思い出す↓なし

五月一日

金伽羅童子、制多伽童子の様子↓なし

十一 五月四日～五月五日

五月六日～十日

第二次長州征伐のころの京大阪の様子。七兵衛、新選組から兵馬への十両を預かる。↓なし

十二 五月二十四日～五月三十日

五月二十五、二十六日

東雲にすっかり心を奪われる兵馬↓なし

十三 五月三十一日～六月九日

十四 六月九日～六月十五日

十五 六月十六日～六月二十四日

十六 六月二十五日～六月二十九日

### 禹門三級の巻

大正十年五月十一日～五月二十三日、  
六月三十日～七月十七日、七月二十六日～十月二日

一 五月十一日～五月二十三日

五月十六日↓一回分なし

五月二十三日

米友が目黒不動の居候となる↓なし

二 六月三十日～七月九日

六月三十日↓一回分なし(場面としては七月一日につながる)

七月四、五日↓二回分なし

三 七月十日～七月十七日

七月十日、十一日↓大幅圧縮

七月十八日～二十五日

駒井甚三郎と金権が会おう↓無明の巻二十八章へ

四 七月二十六日～七月二十九日

五 七月三十日～八月六日

六 八月六日～八月八日

七月九日～二十日↓なし

七 八月二十一日～八月二十八日

八月二十一日

道庵が帰ってくる(のに弁信は出かけた先で道庵がいるかどうか尋ねる)↓  
道庵は戻らず、弁信が出かける。

八月二十二日↓なし

八 八月二十八日～九月七日

九月七日↓一回分なし

九 九月八日～九月二十三日

九月九日～二十日

与八、郁太郎のことで人形師ともめ、お縄になるが、南条に助けられる↓なし

十 九月二十四日～九月二十五日

十一 九月二十六日～十月二日

### 無明の巻

大正十年十月三日～十月十三日、  
大正十四年一月六日～

(大正十四年一月六日以降は「大阪毎日・東京日日新聞」夕刊に掲載)

- 一 大正十四年一月六日(十年十月三日)五日と重なる。五日がほとんど。)
- 二 大正十四年一月七日
- 三 大正十四年一月八日
- 四 大正十四年一月九日～一月十日
- 五 大正十四年一月十一日、十三日(十二日は夕刊休み)
- 六 大正十四年一月十四日～一月十六日
- 七 大正十年十月六日～十月八日 (都新聞)
- 八 大正十年十月九日～十月十日 (都新聞)
- 九 大正十年十月十一日～十月十三日 (都新聞)
- 十 大正十四年一月十七日、十八日、二十日(十九日は夕刊休み)

十月十四日、十五日

郁太郎を抱えた人形師↓なし

十月十六日、七日

米友、小石川の薬園に採用される↓無明の巻二十三章に米友が「小石川の伝通院の学寮」に住み込みで働いているという設定に変更されている。

### 参考

なお、大阪毎日・東京日日新聞夕刊掲載分については、先行研究において綿密な調査が行われているが、若干の修正すべき点がある。まとめ直すと、以下のようになる。

- |        |                     |
|--------|---------------------|
| 無明の巻   | 大正十四年一月六日～五月十二日     |
| 白骨の巻   | 大正十四年五月十三日～八月二十七日   |
| 他生の巻   | 大正十四年八月二十八日～十二月二十八日 |
| 流転の巻   | 大正十五年一月五日～五月二十日     |
| みちりやの巻 | 大正十五年七月八日～十月二十一日    |

めいろの巻

昭和二年十一月二日～三年四月七日

鈴慕の巻

昭和三年五月二十二日～七月十九日

Oceanの巻

昭和三年七月二十日～九月八日

付記 なおこの資料は平成十九年五月二十日に創価大学で行われた現代文学史研究会での発表資料をもとにしている。